

「ムクナ豆」生産に熱視線

健康食品として知られる「ムクナ豆」が宇城市で栽培されている。ドーパミンの前駆物質であるLドーパを含み、人の活動を高める効果が見込まれる。栽培から販売まで地元の農家や加工・販売業者が担っており、希少な食材を扱う6次産業化のモデルとして注目を集めそうだ。



ムクナ豆の栽培園を見学する田主丸薬草研究会のメンバー

宇城市

宇城市で栽培・加工・販売 健康食品を商品化



収穫時期の枯れたムクナ豆(上)と若い時期の豆

「これがムクナですか」。福岡県久留米市の田主丸薬草研究会のメンバー3人が10月20日、三角町の戸馳島にあるムクナ豆の栽培園を訪れた。熊本ムクナ豆研究会の阿曾田清会長(76)ら3人が出迎え、栽培方法を説明しながら収穫時期の枯れた豆と若い豆を並べて見せた。薬草研究会の富田義昭さん(74)は「今日の話参考に、栽培に挑戦したい」と意欲的だった。

ムクナ豆の和名は「八升豆」で原産地はインド。熱帯気候で育ち、国内では熊本のほか和歌山県や鹿児島県、沖縄県などで栽培されているという。一見ソラマメのようで、粉はきな粉の風味がする。宇城市でムクナ豆の栽培が始まったのは2014年。阿曾田さんらが、親交があった研究者から栽培を持ち掛けられたのがきっかけだった。当初は結実しなかったり、カビが発生したりと試行錯誤が続いたが、数年かかって、ようやく収穫にこぎつけた。

次の壁は販路だった。ムクナ豆研究会が相談を持ち掛けたのが、市の誘致企業の敷島印刷(松橋町)。敷島武法社長(65)は地元支援の思いも込め、17年に健康食品販売の「敷島屋」を創業。商品開発に乗り出し、パウダーや錠剤、お茶、麺として販売。加工も市内の業者が手掛けており、パウダーはヨーグルトやプリンにかけたり飲み物に混ぜたりするのがお勧めだ。

ムクナ豆はインドの伝統医学であるアーユルヴェエタで使われてきた。パーキンソン病の治療薬にもLドーパは含まれており、この病気に有効であることが分かっている。ただLドーパを多量に摂取すると合併症のリスクを上げる可能性が見えることから、国立病院機構熊本南病院(松橋町)脳神経内科部長の阪本徹郎医師(44)は「パーキンソン病の患者が摂取する際は、医師の指示に従ってほしい」とアドバイスしている。(飛松佐和子)

クローズ
アップ